

英語構文力テスト作成の試み (第1報)

—— Chomsky の文法理論に沿って ——

伊 部 泰 子

I

われわれは多くの場合、学校で外国語を学習する。この学習では、外国語の基礎的能力が充分につき（これは、学習したものそっくりそのまま使えるだけでなく新しい事態・内容に応用できることを含む）、また、その後、しばらくの間使わなくても基礎的な水準では忘れにくく、少し使うとすぐ回復するような能力をつけておくことが望ましかろう。これらの点については、一つには、言語能力というものの性質が関係してくる。例えば、後者の点についてみると、いわゆる運動系に多く依存する技能のようなものは、一度習得されると忘れにくいという性質があるが、言語能力にも、真に習得されたときにはこのような性質を認めることができるか否かは、言語ないし言語能力観にも係わってくる一つの問題であらう。

チョムスキー (Chomsky, Noam) がその文法モデルをつくるにあたって強調している点に、人間の言語能力には無限性・創造性といえる性質があること、言語構造——言語の構文における「生成規則」は抽象的なものであり、言語能力を獲得することの重要な側面として言語のもつ形式的構造が形成されることなどがある。³⁾

言語の性質としての無限性とか創造性とかいうのは、人間が聞いてあるいは読んで理解できることば、また話しあるいは書けることばは、彼が前もって経験したものに限られず、無限に多くの新しい文 (sentence) を理解したり作ったりすることができる事実を指す。そして、言語能力の本質は、このような無限に多くの文を理解し作り出しうる implicit な能力である。チョムスキー

は、このような性質を可能にする言語構造は抽象的なものであると考える。つまり、言語構造は、その表層構造だけをみたのでは、その本質を把握することができない。表面に出ていない、いわばその背後に控えている文法的関係——深層構造をもみなければならないとする。チョムスキーは、その生成文法(generative grammar)モデルで、まず深層構造(deep structure)と表層構造(surface structure)を分けて考え、深層構造の syntax とは、base string——その構造記述は base phrase-marker による——を生成する規則(rule)の体系であり、これを syntactic component の base、これらの規則を base rules (基底規則) と呼んだ。深層構造を表層形式に転化するものとして、配置転換、挿入などの操作をする変形規則(transformational rule)の体系を⁴⁾考えた。

彼はまた、言語のもつ形式的(formal——substantive に対しての)側面を重視する。そして、スペキュレーションではあるが、精神のある生得的な構造的枠組との関連づけを⁵⁾考える。

彼のこのような理論は、心理学とも接点をもち、興味深い言語構造観、言語能力観である。

言語に関して、チョムスキーの言うような構造や体系が仮定されるならば、このような体系が確実に習得形成されたときには、その言語の使用能力は強力なものとなり、また、いわゆる「忘れる」という現象を蒙りにくいのではないかというスペキュレーションに導かれる。長い間使用しなかった後でも、割合早くその言語の能力を回復するという現象をみる可能性も考えられる。

I

チョムスキーの言語観とその syntax に関する文法モデルに沿った英語力の評価をする試みに手がつけられてもよからう。このような評価を行なうテストを作成するための予備調査として、以下のような企画がなされ、その一部実施した結果が得られた。ここではそれらについて述べる。

この評価の目標は、英語の基底規則 (base rules) および変形規則 (transformational rules) についての能力をみることである。

予備調査としては、これら規則の基本的なものについて難しさの上での分類を得ておくことを狙いとする。このため、基底規則の基本的なもの、単純な変形規則、挿入のある文 (embedded sentence) ——いわゆる複文を生じる変形規則についてかなり綿密に検討を加える。調査は、時間と問題量の関係から、三部に分けられた。

方法は、それぞれ問題とする規則のセットを持っていることが前提とされる文 (sentence) の構成力をみること、および、間接的にはあるが、各規則個別の能力についても検討することを可能にするもの。Scrambled sentence test の様式を用いる。Scrambled sentence test で出来上る文は、文法的には正しいが、意味は、常識的には普通でないもの (できれば, nonsense にしたかったが, feature や complex symbol などを考慮に入れると, 余り極端なものとはできなくなった)。この点は、チョムスキーの syntax の semantics からの独立性という考えに基づいたものである。すなわち、「文法的」という考えは意味論的な意味での “meaningful” とか “significant” とかいうことと同一視することはできない。次の (1) と (2) の文は等しく無意味であるが、英語の話者なら誰でも、前者だけが文法的であることを認めるであろう。

(1) Colorless green ideas sleep furiously. (2) Furiously sleep ideas green colorless.⁶⁾」

Ⅲ

調査の第一部、基底規則に関するものを以下で報告する。

目 的

検討すべく取りあげた基底規則は、

- 1) $S \rightarrow NP \wedge \text{Predicate-Phrase}$
- 2) $\text{Predicate-Phrase} \rightarrow \text{Aux} \wedge VP$

- 3) $VP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Copula} \wedge \text{Predicate} \\ V \wedge NP \\ V \wedge \text{Prep-Phrase} \\ V \wedge NP \wedge \text{Prep-Phrase} \end{array} \right\}$
- 4) $Aux \rightarrow \text{Tense (M) (Aspect)}$
- 5) $\text{Prep-Phrase} \rightarrow \text{Preposition} \wedge NP$
- 6) $NP \rightarrow (\text{Det}) N$
- 7) $\text{Predicate} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Adjective} \\ \text{Predicate-Nominal} \end{array} \right\}$

である。⁷⁾規則 4) の右辺にある Tense には現在と過去の別, M には can, may, must, will など, Aspect には完了と進行がある。

(1°) 上記 1), 2), 3), 4), 6), および, 文によって用いられる場合と用いられない場合があるが, 5), 7) の規則のセットを持っていることを前提とする文 (sentence) の構成力をみる。(→結果の α 分析)

(2°) 上記規則のどれができやすくどれができにくいかをみるために,
(i) 規則 1) のレベルについて, (ii) 規則 2) と 3) のレベルについて,
(iii) 規則 4), 5), 6), 7) のレベルについて, の三段階に分けて, 間接的にはあるが, その出来具合を検討する。すなわち,

(i) では, NP と Predicate-Phrase の分離ができているか否か,

(ii) では, ① $Aux \wedge \left\{ \begin{array}{l} V \\ \text{Copula} \end{array} \right\}$, ② $\left\{ \begin{array}{l} NP \\ \text{Predicate} \\ \text{Prep-Phrase} \end{array} \right\}$, ③ Prep-Phrase

または空位 (blank) の 2 つないし 3 つの単位が分離でき, この順序 (①—②—③) に配列されているか,

(iii) では, (ii) の ①, ②, ③の各单位内での単語の配列順が正しいか否かをみることになる。(→結果の β 分析)

(1°), (2°) とも, 規則 3) の右辺にみられる VP の種別, 規則 4) の右辺での組合せから生じる Aux の種別により難易度が異なるかについて, また, これらの区分をはずして全体としての出来具合の程度を調べる。

調査問題の構成

調査はⅡで述べたように scrambled sentence test で、しかも構成された文は文法的には正しいが、意味はやや奇妙なものである。

各問は、単語単位でその配列順が無作為化された⁸⁾。

問題は、VP の種別、Aux の種別の比較が可能になるような計画に沿ってくみ込まれた⁹⁾。それぞれの比較において、比較条件以外——NP, Prep-Phrase 内の構成、単語の難しさ、構成される文の nonsense の程度(後二者の統制は¹⁰⁾不十分であったが)——はなるべく均質になるようにした。

比較のために、特殊構文の名の下に、6種の構文が加えられた¹¹⁾。

問題総数は89問。

問題配列順は、VP および Aux の種別に関して無作為化された。

問題文で使用された単語は、中学校2年用 Jack and Betty のテキストに出てくる程度のものとした。更に、その中でも難しそうな10個の単語には別に意味を与えた。

被調査者

東大附属中学校の3年生、5月末から6月中旬にかけての時期。3学級120名(男61, 女59)、但し当報告で結果分析の対象とされたのは、2学級79名(男40, 女39)。

テスト時間

中学校の時間的制約から、89問は、46問(第1回目)と43問に分けて、約2週間の間隔をおいて施行された。インストラクションの時間を除いて、第1回目は48分、第2回目は45分とした。

結 果

目的の節の(1°)および(2°)に沿って分析される。前者を α 分析、後者を β 分析と名づける。

1. α 分析

採 点：① 正答、② 準正答(冠詞の脱落および定冠詞と不定冠詞の置き違

え以外は正しい), ③ 誤答, ④ 別正答 (構文が予定したものと異なる——例えば現在完了を予定した文が, have を本動詞とし, 過去分詞を形容詞的に用いる——が正しい文), ⑤ 別準正答 (冠詞の脱落または定冠詞と不定冠詞の置き換えを除けば別正答になるもの), ⑥ 別誤答 (構文的には④を意図していることが明瞭であって誤っているもの) に分けて採点した。

特殊構文のうち none of them の構文, be going to の構文は分析対象からはずされた。(前者は none の意味を知らない者が多かった為, 後者は, Aux の種別に欠ける為。)

正答率: 成績の指標として次のように算出される値を用いる。正答数 (上記①のみで④は含まぬ) を正答数と誤答数 (上記②) の和で除したものの。この値は, 各問別, 個人別, 問題別について算出されうる。完全正答の場合は1.00である。

正答率にもとづく分析: 特殊構文以外の全問題 (下に述べる VP の4種別を合計したものになる) の全員を通じて (問題×人) の正答率は .70, 特殊構文群 (全部合わせたもの) の正答率は .65 である。

基底規則 3) (目的の節参照) の右辺によって生じる VP の4種別の全員についての正答率は表1の第2欄に示す如くである。

表1 VP の種別による正答率 (α 分析)

	正 答 率
Copula∧Predicate	.79 (525)
V∧NP	.74 (523)
V∧Prep-Phrase	.67 (503)
V∧NP∧Prep-Phrase	.59 (467)

()内数値は, 第2欄では正答数と誤答数の総和, 以下表5まではこれに準ずる。

2% (片側1%) の有意水準の検定 (臨界比による) で差のあるのは Copula∧Predicate と V∧Prep-Phrase および V∧NP∧Prep-Phrase の間,

V $\frown$ NP と V $\frown$ Prep-Phrase および V $\frown$ NP $\frown$ Prep-Phrase の間である。Copula $\frown$ Predicate と V $\frown$ NP の間には5%の有意水準で差がある。従って、この VP の4つの種別の間には難しさの程度に差があると考えられる。Copula $\frown$ Predicate, V $\frown$ NP, V $\frown$ Prep-Phrase, V $\frown$ NP $\frown$ Prep-Phrase の順で出来にくくなっていると考えてもよいかもしれぬ。少くとも、文の長さ・複雑さから言って、V $\frown$ NP $\frown$ Prep-Phrase と他の3種別との差は、前者が難しいと結論できよう。また、さらに、現在の中学校の英語教材からみて、初歩的な馴れの点で Copula $\frown$ Predicate が最も易しいと結論してもよからう。

規則 4) の右辺の組合せや内容から生じる Aux の種別による正答率は表 2, 3, 4, 5に示す。

表 2 Tense 別正答率 (α 分析)

	Copula $\frown$ Predicate	他の3つの VP の種別の総合
現 在	.89 (299)	.74 (897)
過 去	.87 (270)	.75 (955)

表 3 Mの有無別 (α 分析)

M有	.51 (836)
M無	.69 (842)

表 4 Aspect 別 (α 分析)

Aspect 無	.79 (619)	.70 (692)
完 了	.80 (662)	.76 (694)
進 行	.75 (726)	↑別誤答を 加えた場合

表 5 Mと Aspect の比較 (α 分析)

完 了	.80 (359)	.70 (413)
進 行	.77 (397)	.73 (416)
M 有	.67 (415)	↑別誤答を 加えた場合
単 純	.69 (457)	

表3のM有と表5のM有では、前者に完了とV $\frown$ NP $\frown$ Prep-Phraseの現在進行が含まれている点で、また表4の完了、進行と表5のそれらとは、前者には過去が含まれるが後者は現在のみという点で異なる。

Tense の現在と過去の間には差は認められない (表 2)。

Mの有無の間には、完了や進行を伴うものには差があるが、伴わぬものには差がない (表 3, 5)。完了や進行と複合した場合に難しくなるのだろう。

完了、進行については、現在も過去も含む場合には、単純形 (Mも Aspect もなしのもの) との間に差はない (表 4)。しかし、現在形のみについてみると、完了や進行はM有や単純形との間に差があり (両側で 2%)、しかもこの標本での正答率は完了や進行の方が高い。Aspect 有りの方が単純形よりよく出来ることの説明はやや困難である。(最近の学習内容との関係があるのかもしれない。) しかし、ここで、完了と進行には「別誤答」(⑥) がかなりあるので、誤答にこれを加えると、正答率の単純形との間の差はなくなる。また、現在形の場合は進行と完了およびM有りの間に過去を含む場合は完了と進行および単純形の間にやや差を生じる。標本では完了は進行より出来がわるい。別誤答を加えない場合は完了と進行の間に差はない。

別誤答により左右される正答率の問題は、多肢選択形のテストで事情をより明かにすることが出来よう。

また、もし単純形の出来が悪いとすれば (別誤答を加えるとこの現象はなくなるが)、その原因として、これら形式的側面によるのではなく、問題作成上の失敗であるが、内容的 (単語、文の nonsense の程度など) にむずかしいものがあつたことによることがあげられるかもしれない。

2. β 分析

目的の節 (2°) で述べた (i), (ii), (iii) の各レベルでの、およびこれらレベル間の比較分析を行う。

採点: α 分析での正答 (①) と誤答 (③) についてのみ行う。(i), (ii), (iii) の各レベルそれぞれについて正しいものには 1 点、誤りには 0 点を与える。レベル (iii) については、その文中のすべての単位——例えば、NP $\wedge$ Aux $\wedge$ V $\wedge$ NP の連鎖では、2つのNP も Aux $\wedge$ V もすべて——ができているときは 1 点、1つの単位でも間違っていたら 0 点を与える。

正答率：レベル (i), (ii), (iii) それぞれについて上述の得点の合計をスコアリングの対象とされた問題数で除したもの。完全正答は 1.00 である。

正答率にもとづく分析：VP の 4 種別、レベル (i), (ii), (iii) についての平均正答率は、表 6 に示す。

表 6 VP の種別・規則のレベル別正答率 (β 分析)

	(i)	(ii)	(iii)	正答数+誤答数
Copula $\wedge$ Predicate	.85	.83	.81	529
V $\wedge$ NP	.77	.75	.75	527
V $\wedge$ Prep-Phrase	.81	.70	.71	509
V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase	.72	.61	.63	462
合 計	.79	.72	.73	2027

レベル (i) では、2% (片側 1%) の有意水準で Copula $\wedge$ Predicate と V $\wedge$ NP および V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase の間に、V $\wedge$ Prep-Phrase と V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase の間に差がある。10% (片側 5%) の有意水準では 4 つの VP の種別間にはすべて差がある。この正答率は当標本では Copula $\wedge$ Predicate が最も高く、順次 V $\wedge$ Prep-Phrase, V $\wedge$ NP, V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase となっている。 α 分析の際にくらべ、V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase 以外の 3 種別間の差異が狭まっていること、V $\wedge$ Prep-Phrase と V $\wedge$ NP の動向が異っていることが認められる。

レベル (ii) および (iii) では、2% (片側 1%) の水準で Copula $\wedge$ Predicate と V $\wedge$ NP および V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase との間に、また V $\wedge$ NP および V $\wedge$ Prep-Phrase と V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase との間に差がある。後者は、レベル (i) には認められなかったものである。10% の有意水準では、4 種別間にすべて差があり、この標本では Copula $\wedge$ Predicate が最も容易で、V $\wedge$ NP, V $\wedge$ Prep-Phrase, V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase の順で順次むずかしくなっている。

レベル (i), (ii), (iii) を通じて、Copula $\wedge$ Predicate と V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-

Phrase との差は、 α 分析で述べたと同じ理由で、前者が後者より容易だと言えよう。

レベル (i), (ii), (iii) 間の比較をすると、 $V \neg \text{Prep-Phrase}$ と $V \neg \text{NP} \neg \text{Prep-Phrase}$ にだけレベル (i) とレベル (ii) 以下の間に差があり、この標本では、前者の正答率が高い。これら2つのタイプの文では、(ii), (iii) のレベルでの出来が悪くなっていると結論してもよからう。 $V \neg \text{NP} \neg \text{Prep-Phrase}$ のレベル (ii) での正答率の低下の一因として、NP と Prep-Phrase の順序が入れかわった間違いがかなりあった。

VP の4種別あわせたものについてもレベル (i) と (ii) 以下には差がある。

Aux の種別についてみると、Tense, M, Aspect, M と Aspect での比較は、表7, 8, 9, 10 に示す如くである。

Tense については、Copula $\neg$ Predicate のレベル (i), (ii) で現在と過去の間には差があるが、他の3つの VP の種別をあわせたものにはこの傾向はない。

Mについては、完了や進行を伴うものも含めた場合は、各レベルともM有とM無の間に差が認められ、この標本では前者の方がむずかしい(表8)。しかし、この傾向は、完了や進行を伴わないM有と単純形の間には認められない。この標本ではレベル (i) でかえってM有の正答率が高くなっている。これは α 分析の Aspect の分析のところで述べた単純形の内容的むずかしさが原因かもしれない。

Aspect に関しては、過去も含む場合は、レベル (i) で完了と Aspect 無の間に、レベル (ii) で進行と Aspect 無の間に差があるが、この標本ではいずれも Aspect 無の正答率が低い。現在のみの場合は、各レベルとも完了、進行ともに単純形と差があるが、この標本では、やはり単純形の正答率が低い。しかしこれらを結論することは、形式的側面の解釈の観点からは困難であろう。 α 分析で述べたような別誤答の問題、単純形の内容上の問題で処理できるかもしれない。

表 7 Tense 別正答率 (β 分析)

		(i)	(ii)	(iii)	正答数+誤答数
Copula-Predicate	現在	.97	.96	.89	299
	過去	.89	.89	.90	270
他の3つの VP の 種別の合計	現在	.81	.78	.79	897
	過去	.79	.75	.77	955

表 8 Mの有無別 (β 分析)

	(i)	(ii)	(iii)	正答数+誤答数
M 有	.68	.57	.54	836
M 無	.76	.69	.71	842

表 9 Aspect の別 (β 分析)

	(i)	(ii)	(iii)	正答数+誤答数
完 了	.85(.76)	.79(.71)	.80(.71)	619(692)
進 行	.84(.81)	.82(.78)	.83(.79)	662(694)
Aspect 無	.79	.74	.78	726

()内数値は、別誤答を加えた場合。表10でもこれにならう。

表10 Mと Aspect の比較 (β 分析)

	(i)	(ii)	(iii)	正答数+誤答数
完 了	.86(.75)	.79(.69)	.80(.70)	359(413)
進 行	.83(.79)	.79(.74)	.78(.79)	397(416)
M 有	.84	.71	.68	415
単 純 形	.75	.71	.73	457

完了と進行の相互間にはどのレベルでも有意差は出ていない。

レベル間の比較をすると、M有の場合と完了ではレベル(i)とレベル(ii)以

下に差があり、前者の正答率が高い。Mが有ることや完了形であることは、S→NP∧Predicate-Phraseの段階では影響しないが、それ以上の細部になると影響してくると解釈されよう。進行についてはこのような傾向は余りはっきりしない。殊に過去を含む場合には差はほとんどない。

3. 項目分析

この調査の内容の検討および縮約したテストを構成する資料を得るという2つの目的で行う。

正答率に関する分析によると、4つのVPの種別による差異があるので、この4つのグループ別に分析する。また、意味不明としたものの数が多い(1/3以上が不明とした)単語を含む問は分析の対象からはずした。

VPの4つの種別に正答数の合計を算出し、これをそれぞれのグループでの基準とし、グループ別にこの値と各問の正否との点双列相関を求める。Copula∧Predicateグループでは.40以上の相関をもつものが6/8個、最高は.66、.2代以下の相関係数をとるものは2/8個；V∧NPでは、.50以上が4/11個、最高が.65、.3代が2/11個、.2代以下が5/11個；V∧Prep-Phraseでは、.50以上が4/11個、最高は.72、.4代が3/11個であともすべて.3代；V∧NP∧Prep-Phraseでは、.50以上が4/17個、最高が.65、.4代が4/17個、.2代以下が7/17個となっている。V∧NP、V∧NP∧Prep-Phraseで相関の低いものが多い。

相関を高めたり低めたりする要因として次のようなものが考えられる。1) グループを構成する問題群の大多数がある類似した性質をもつ——ここでは例えばAuxのAspect——ときそれと同類の間の相関は高められる。V∧NPのグループではこの要因が働いているのではないかと疑われる(註12参照)。2) ほとんどすべての人ができあるいはできない問題は、基準がある広がりをもった分布をしている限り相関は低くなる。できている方の例として、Copula∧Predicateの間3, 75, V∧NPの間70, V∧NP∧Prep-Phraseの間6, できない方では、V∧NP∧Prep-Phraseの間57などがあげられよう。

4. 中学校の英語の成績との相関

この調査とはほぼ同時期に行われた中間試験の英語の成績との相関は、 α 分析の正答率では .50, β 分析の正答率では、レベル (i), (ii), (iii) でそれぞれ .51, .35, .47 である。 β (ii) の相関がやや低い。

以上、企画と結果の報告にとどまり、考察が充分なされなかったが、これは調査の既に解っている不備の点（単語の意味不明のための正答率の低下など）をおぎない、標本数をさらに増した時まで、また現在進行中の変形規則に関する調査結果とあわせて考察できる時にゆずりたい。

なお、Ⅲの問題作成と結果整理は、東京大学大学院学生黒板玲子さんと共同で行った。

註

- 1) Chomsky, N., *Syntactic Structures*, 1957, Chap. 3.
 ———, *Some Methodological Remarks on Generative Grammar*, *Word*, 17, 219—34, 1961, § 1.
 ———, *Aspects of the Theory of Syntax*, 1965, Chap. 1.
 ———, 川本茂雄訳「言語と人間科学」ことばの宇宙 11, 1966 中。これは講演記録である。
- 2) Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, *op. cit.*, Chap. 1.
 ———, 鈴木孝夫訳「こころの研究に対する言語学の貢献」ことばの宇宙 11 (前出) 中。これも講演記録である。
- 3) Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, *op. cit.*, Chap. 1.
- 4) Chomsky, N., *ibid.*, Chap. 1 & Chap. 3.
 ———, 鈴木孝夫訳「こころの研究に対する言語学の貢献」(前出)
- 5) Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, *op. cit.*, Chap. 1.
 ———, 鈴木孝夫訳「こころの研究に対する言語学の貢献」(前出)。
- 6) Chomsky, N., *Syntactic Structures*, *op. cit.*, Chap. 2 § 3. 日本語訳は、勇康雄訳『文法の構造』1963, 4 頁による。
- 7) 表記法は、Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, *op. cit.* による。規

則 3) の { } 内の選択肢には, $VP \rightarrow V \neg S'$ が含まれていない。これは, 変形規則の部でくみ入れる。

8) 例えば, pulled a a knife Jack has flower with.

9) VP の種別と Aux の種別を組みあわせた問題数は下表の通りである。

	Copula $\neg$ Predicate	V $\neg$ NP	V $\neg$ Prep-Phrase	V $\neg$ NP $\neg$ Prep-Phrase
現 在	4	3	4	4
現 在・M	2	2	2	2
現在・完了	2	2	2	2
現在・進行	—	2	2	2
現・M・完	—	2	—	2
現・M・進	—	—	—	2
過 去	2	2	2	2
過去・完了	2	2	—	2
過去・進行	—	2	2	2

10) <Copula $\neg$ Predicate での第一の NP と Predicate の構成>。

- 1. 第一の NP : Det $\neg$ N, Predicate : Adj₀。
- 2. 両者あわせて Pron 又は N と Det $\neg$ N₀。
- 3. 〃 Det $\neg$ N 2₀。
- 4. 〃 Det $\neg$ N と Det $\neg$ N $\neg$ Post nominal modifier。

<V $\neg$ NP での第一の NP と V の次の NP の構成>

- 1. 両者あわせて Pron 又は N と Det $\neg$ N₀。
- 2. 〃 Det $\neg$ N 2つ。
- 3. 両者あわせて Det $\neg$ N と Det $\neg$ N $\neg$ Post nominal modifier。

<V $\neg$ Prep-Phrase での第一の NP と Prep-Phrase 内の NP の構成>

- 1. 両者あわせて Pron 又は N と Det $\neg$ N₀。
- 2. 〃 Det $\neg$ N 2つ。
- 3. 〃 Det $\neg$ N と Det $\neg$ Adj $\neg$ N*。
- 4. 第一の NP が Det $\neg$ N, Prep-Phrase は 1つの Adv₀。

<V $\neg$ NP $\neg$ Prep-Phrase での第一の NP と V の次の NP と Prep-Phrase 内の NP の構成>

- 1. 三者で, Pron 又は N と Det $\neg$ N 2つ。
- 2. 〃 Det $\neg$ N 3つ。
- 3. 〃 Det $\neg$ N 2つと Det $\neg$ Adj $\neg$ N* 1つ。

4. 2つの NP は Det $\wedge$ N で Prep-Phrase は1つの Adv。

Aux の種別により, 2問しか入れられなかつた場合は○印のものが使われた。

* 印のものを入れたのは誤りであった。

11) V+O+C, V+O+O, V+Prt (前置詞などを伴うもの), There+be 動詞構文,
none of them の構文, be going to の構文。

12)

Copula $\wedge$ Predicate	V $\wedge$ NP	V $\wedge$ Prep-Phrase	V $\wedge$ NP $\wedge$ Prep-Phrase
.66 現	.65 現・進	.72 過・進	.65 過・完
.57 現・完	.61 現・完	.68 現・進	.52 現・M・完
.55 現	.61 現・M	.57 現・完	.50 現・進
.50 現・M	.50 現・進	.50 現	.50 現・進
.45 現・完	.32 現・完	.48 現・進	.48 現
.40 現・完	.30 現・完	.47 現・M	.48 過
.21 過	.28 過・進	.46 現	.41 現・M・完
.10 現	.21 現	.39 過	.40 過
	.21 現・完	.39 現・進	.39 現・M
	.15 現・M・完	.37 現	.37 現・M・進
	.35 過	.35 現・完	.25 現・M・進
			.24 現・M
			.22 過・進
			.21 現・完
			.20 現・M・進
			.19 過・進
			.15 現

各欄の左側は相関係数, 右側は, Aux の種別。